相談物語

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
相談物語

【Ｎコード】
Ｎ２８９２Ｚ

【作者名】
刃下

【あらすじ】
八九寺が皆さんの相談にのるはずのおはなし

一話目（前書き）

塾がやける前のおはなし

一話目

閑散とした教室内。
広い部屋の中にぽつんと置かれた四つの机。
二つずつ、向かい合わせで置かれている。
「何で僕はここに連れてこられたんだよ」
僕は向かいに座っている少女に疑問を投げかけた。
「ふっふっふっ、それはですね阿良々木さん。これから私が皆さんの悩みをばったばったと解決していく、お悩み相談室をはじめるからですよ！」
少女は勢いよく椅子から立ち上がった。
おかげで元々塾だったこの教室の床と椅子の足がこすれる音が部屋中に鳴り響く。
「へー」
僕は小指で鼻くそをほじりながら、八九寺の熱弁に耳を傾けた。
「私は仕事柄よく街をぶらついているのですが、道で会うすべての人が暗い顔をしています。この世は不景気。皆さんが意気消沈なのも分かります。誰しもが心のどこかに悩みを抱えているのです。そ・こ・で、この八九寺まよいが皆さんの相談にのろうではないかと思い、立ちあがりました！」
八九寺はどこかの大統領みたいに大袈裟に身振り手振りを交えて説明する。
ていうか、お前が街をアリのように歩き回っていたのは仕事だったのか。
「何故こんな茶番を繰り広げているのかは分かったよ。でも言うほど皆、暗い顔してるか？」
「してますよ！そんなマヌケ面しているのは厚顔無恥でブルジョワな阿良々木さんくらいなものです」
「ぐっ・・・じゃあなんでそのマヌケ面した僕はここに呼ばれたん

だよ。僕の悩みを聞く必要はないじゃないか」
「ええ、阿良々木さんの相談にのる気はありません。それは解決できないことですから」
八九寺は声のトーンを落としながら言った。
えらく簡単に僕の悩みを諦めてくれるじゃないか。
まあ八九寺には吸血鬼について少なからず教えているからな、気をつかってくれたのかもしれない。
「どうせ阿良々木さんの悩みなんて、妹さんに手を出しそうだとか、彼女の後輩に手を出しそうだとか、妹の同級生に手を出しそうだとかそんなことなんですから」
「違うわ！」
気なんて一つも使っていなかった。
「まさか小学生である私に手を！？」
「・・・」
「否定して下さい阿良々木さん、怖すぎます！」

「それで結局のところ僕はなんで呼び出されたんだよ」
「ああ、そうでした。阿良々木さんには私の助手になっていただこうと思いお呼びしたのです」
「助手だって？」
僕は眉間にしわを寄せながら、八九寺の次の言葉を待った。
「ええ、助手です。嫌ですか？」
「嫌っていうかさー。何するんだよ、悩み相談の助手って」
「そうですね、例えばお客様が来た時にドアを開け閉めしたりですとか、万が一悩み相談で私がまずい事を言った時も、助手である阿良々木さんが横でうなずいていれば、多少なりと信憑性が上がってお客様をうまく騙せるかもしれないじゃないですか」
八九寺は笑顔で恐ろしいことを言った。
なんだその第三者を使った心理誘導は。
まるで詐欺師や宗教勧誘の常套手段みたいじゃないか。

「僕はそんな詐欺行為のようなことはしないぞ。だいたいお前の言ってる助手は世間では雑用、あるいはさくらって言うんだよ」
「阿良々木さん。阿良々木さんは今、助手という職業がどれほどホットな職業なのか知らないようですね」
「何っ！？」
八九寺は、はぁっとため息をつきながら僕の側へと歩み寄る。
「助手。それはつまり誰かをサポートするための職。そのサポートの仕方によっては恋が芽生えることだってあるんですよ」
「な、なんだってぇ！？」
「ある時はアメリカ帰りの天才。またある時は人工的に作られた人型の女子高生ロボット。どうです、阿良々木さん。阿良々木さんも過去にメールを送ったり、黒猫と喋ってみたくはありませんか！」
「ねーよ」
一人熱くなった八九寺を見ていると、逆になんだか落ち着いてきた。
「おほん、失礼しました。阿良々木さんなら意気強盗してくれると思いまして」
「意気強盗？」
「失礼、噛みました。意気投合してくれると思いまして」
「お前も普通に噛むことがあるんだな」
「ええ、返す言葉もありません・・・」
八九寺は腰を折り、深く頭を下げた。
「それにしても、急に呼び出されるから何事かと思ったよ」
「ええ、私も急な事なので阿良々木さんを捕まえれないかと思いました」
「八九寺、ら抜き言葉になってるぞ」
「おっと、これは失礼しました。あぎさん」
「人の名前から、らを抜くな。僕の名前は阿良々木だ」
「失礼、噛みました」
「これはわざとだ」
「失礼、かままま」

「はなからちゃんと言う気ないだろ・・・」

「それでは阿良々木さん。さっさとお客様を呼んじゃってください」
「え、僕が呼ぶの？」
「当たり前じゃないですか！呼ばずにこんな廃墟に入ってくる人なんて、ホームレスか警察ぐらいですよ。ささっ、急いで呼んじゃってください」
「ああ・・・」
僕は携帯電話を開き、少ないメモリーの中から一つを選んだ。

一話目（後書き）

これは不定期更新
よかったら他のも見てね

二話目（前書き）

いろいろおかしいかもしれない
でもきっとだいじょうぶ

二話目

「それで、どうしてそのお悩み相談に私が呼び出されなきゃいけないのかしら阿良々木くん」
眼光鋭く僕を見据えた戦場ヶ原。
「いや、本当に悪いと思ってるよ」
手を合わせながら頭を下げる。
「阿良々木君、私の記憶が正しければ今日のあなたは自宅で勉強をしているはずよね」
「うっ・・・」
数学以外のテストの点数が平均点の真上を這うほどに悪かった僕はある日からクラストップの羽川と成績優秀の戦場ヶ原に交代制で勉強を教わっている。
順番的に言えば今日は羽川の順番なのだが、用事があるとかで自宅での勉強を言い渡されていた。
携帯メールでページから問題番号まで指定して、羽川が考えるこれなら一日でこなせるだろうという絶望的な量の課題が出された。
驚くべきことに僕がつまずきそうな問題を先読みして解説まで書いてある。
もしかして羽川は僕の買った問題集の中身を全部暗記しているのだろうか？
羽川ならあり得なくもないな。
「そこまでしてもらっておいて、全く手をつけていなかったら流石の羽川さんも怒るんじゃないかしら」
ごもっともございます・・・。
あまりに多い課題に、昼飯食べてから本気でやろうなんて現実逃避して午前中は全然机につかなかったもんで、今日はまだ問題集を開いてすらいない。
それもこれもこのドアの向こうにいる年中生足のツインテイルのせ

いだ。
「猫を殺せば七代祟ると言うけれど、猫に殺されたら何代先まで祟ればいいのかしら？ね、阿良々木くん」
「ぐっ・・・何でそこで猫が出て来るんだよ」
「さあ、何故かしら？」
戦場ヶ原は涼しい顔で笑った。
「・・・それにしても気合の入った格好で来たんだな」
戦場ヶ原はスカートをひらりと揺らし、側にじりじりと寄ってくる。今日の戦場ヶ原は戦場ヶ原の家で勉強会をする時とは違う、よそ行きの衣装だ。
「阿良々木君にしてはいいところに気がつくじゃない。理由を教えて欲しいのかしら？」
「ん、まあな・・・」
「阿良々木くん、ここに来るまで一切呼び出した理由を言わなかったでしょ？そしてメールにはここに来て欲しいとしか書いてなかったわ」
「そうだな、確かに悩み相談うんぬんを伝えてなかったのは悪かったよ」
「次のメールには忍野さんは不在だと書いてあった。つまり私は廃ビルには阿良々木君しかいないと思っていたの」
戦場ヶ原は白い指で僕のアゴをくいっとあげる。
まさか・・・。
「私は阿良々木君に廃ビルで二人きりで会いましょうと誘われたんだって勘違いしてここまで来たの」
すごく怒ってらっしゃる！
戦場ヶ原は僕の髪の毛を一本つまむと、僕の目を見つめながらゆっくり引き抜いた。
「す、すいませんでした」
空笑いと冷や汗が同時に出る。
しかし謝罪は戦場ヶ原に届かなかった。

「私もう阿良々木君殺しちゃってもいいわよね。これだけの辱めを受けて・・・あっでも駄目か。阿良々木君すぐ再生しちゃうし。それに阿良々木君を殺しちゃったら私は自分を殺さなきゃいけなくなるわ。どうしましょう・・・うふふ」
目の前の彼氏が死んだ後の想像をする戦場ヶ原が自分の世界から戻ってくるのを待つ。
「阿良々木さん、ちょっときてください」
ドアを少しだけ開けて、八九寺が僕を呼び出した。
「何だよ、ちゃんと呼んだぞほら」
「ほらじゃないですよ、阿良々木さん。とりあえず緊急に申し上げなければいけないことができました。阿良々木さんだけ入ってきてください」
「どうした？」
実は僕が政府に作られた人工のアンドロイドで、代わりなら何体でもいるというところまで空想が進んだ戦場ヶ原を置いて、教室の中に入った。
「阿良々木さん、何でよりにもよってあの方なんですか」
「お前が誰か呼べって言ったんだろ」
「言いました、言いましたけど」
八九寺はため息をつきながら、僕を諭すように続ける。
「あの方、私のこと見えないし私の声も聞こえないでしょ」
「あっ」
うっかりしていた。
そういえば戦場ヶ原って八九寺の姿見えないんだっけ。
まずいな、このまま行くと戦場ヶ原が僕に悩み相談をしているだけになるぞ。
プライドの高いあいつのことだから、最悪何の悩みも打ち明けないってことも考えられるし。
「はぁ・・・」
八九寺はもう一度ため息をつき、置いていたリュックサックを背負

いなおした。
「もういいです、阿良々木さん。私は他の教室に行ってるんで、どうぞお二人でちちくりあってて下さい」
足元を見ながら、ぽつぽつと歩き始める八九寺。
悪い事したなあと思ったが、僕にも疑問が一つ浮かんだ。
「僕が呼べてお前が見える相手って誰だよ」
八九寺はその場でぴたっと歩くのをやめて、首だけ振り返る。
「羽川さんがいるじゃないですか」
「羽川は今日用事でいないぞ。だから僕がここに居られる訳だし」
「え、そうなんですか？」
僕と八九寺は一緒に固まってしまった。
「・・・ってことは僕が呼べてお前が悩み相談にのれる相手なんていないんじゃないか？」
「てんまつほんとうでしたね」
「それを言うなら本末転倒な」
二人で顔を見合わせて笑う。
「だいたい阿良々木さんの友達の少なさがこの問題の起因じゃないですか！」
と、思ったら急に噛み付いてくる八九寺。
「なんだとー！？」
そのまま子供の喧嘩に発展する。
「じたばたと何をやっているの阿良々木君」
自分の世界から戻った戦場ヶ原が、教室内の騒がしさに気がつき入ってきた。
まずい、このままだと僕は一人で取っ組み合いをするやばいやつになってしまう。
あれ、こんなこと前にもあったような・・・。
「ぐるるるるるるがあああああ」
僕は八九寺から離れようとするが、八九寺はいまだ猛獣の如く僕に噛み付こうとしていてなかなか離れない。

こうなれば一回揉みしだいて動きを止めるか？
「阿良々木君、・・・一体何をしているのかしら・・・」
「ちょ、待ってくれ戦場ヶ原。今やめるから」
「小学生女児に何をやっているのか、説明してくれるかしら阿良々木暦君」
「「え！？」」
喧嘩はあっけなく止まった。

二話目（後書き）

不定期更新です
よかったら他の書いたやつも見てね

三話目（前書き）

相変わらずおかしい気がする
おかしくない気もする

三話目

「へえ、この子があの時の八九寺ちゃん」
「そ、そうなんだよ」
向かいの席に座っていた戦場ヶ原は僕の胸倉を掴み三角定規の先を眼球に触れるか触れないかまで突き出したところでようやく僕の言葉に耳を傾けた。
「なんだ、それならそうと私が動き出す前に言いなさいよ。もう少しであなたの眼球の南半球が消滅するところだったわ」
僕が席についてから第一声を発し終わる前にお前が動き出したんだろ。
「と、とりあえず分かってもらえたんなら、僕の目の前にあるそれをさっさとどけてくれ」
「ええ」
冷静になった戦場ヶ原は、三角定規を服のどこかへしまった。
「それにしても変ですね」
隣に座った八九寺が首をかしげてうーんと唸り声をあげた。
「どうして戦場ヶ原さんが私の姿を見ることができるのでしょう」
「な、不思議だよな」
「うーん、これは難問です」
僕はしわの寄った首元をなおしながら八九寺を見た。
悩んでいる最中、八九寺は首を上下に揺らし一緒にツインテイルもぴょこぴょこと上下に跳ねる。
近くで見ていると無性に触りたくなるのは僕だけだろうか。
「先に言っておくわ、阿良々木君。前も言ったけど、私は子供という存在が嫌いなの。それは相手が生きていなくて、幽霊であっても。例外はなしよ」
「そんな言い方は、・・・（ないんじゃないかな）」
言い返そうとするが、目の前の戦場ヶ原の顔が憤怒の色に染まって

いたため口ごもってしまった。
「八九寺真宵ちゃん、あなた阿良々木君のこと、吸血鬼についてもよく知っているそうね。それにこんなごっこ遊びまでしてえらく仲が良さそうじゃない。気に入らないわ。あなた、私の所有物の何なのかしら？」
戦場ヶ原はすごい目つきで八九寺をにらみつけた。
「ひぅ」
八九寺はがたがたと震えて僕の後ろに身を隠した。
「・・・」
口を挟まないでおこう。
わざわざ自分からあの絶対零度の視線に晒される必要もあるまい。
どうせ次は僕の番だ。
「阿良々木さん、何故黙っているんですか。私のことをどう思っているかあの人に伝えてくださいよ」
僕の影に隠れているくせに、僕には強気なことを言う八九寺。
「どう思ってるって・・・んー、トラックに描かれた赤いふんどしって感じかな。会えたらその日一日ラッキーみたいな」
「人のことを茶柱と同じにしないでください！忘れたんですか、私と阿良々木さんはくんずほぐれつで絡み合った関係じゃないですか！」
「阿良々木君、あなた・・・」
「ひっ、違う違う違う。ここにきて何言ってんだよ八九寺」
「私と揉みくちゃになったじゃないですか」
「おい、何言ってんだよ！あれは喧嘩しただ」
「阿良々木君、舌を出しなさい」
「はいっ！」
僕は黙って口を開けて、ベロを出す。
戦場ヶ原はおもむろに僕の舌先を指で掴んだ。
「あぁぁ・・・あんえほう（あのお・・・なんでしょう）」
舌を突き出し、口を開けたままなので自然と喋ってる言葉がおかし

くなる。
口に刀を咥えたまま綺麗な言葉を喋るなんて絶対不可能だ。
「色々と八九寺ちゃんに聞きたいことができたわ。阿良々木君は少し黙っていて頂戴。でないと舌を引っこ抜くわよ」
いつの間にか左手には分度器を持っていたリアル閻魔大王。
引っこ抜くどころか切り落とす気まんまんだろ。
「あええ、あええ、あえおー！（やめて、やめて、やめろー！）」
「あら、それでも騒ぐのね。ならこの舌は今日の記念に私が貰っておくわ」
何の記念だよ。とか考えてるうちにどんどんと分度器が近づいてくる。
その時、半狂乱となった戦場ヶ原のそで元からシャーペンが一本転がり出る。
ちょうどよく手元に転がってきたシャーペンを取り、机に文字を書いた。
「あら、最後の悪あがきかしら。いいわよ、見てあげる」
戦場ヶ原はなおも分度器をかまえたまま、机に目を落とす。
『ぼくがすきなのはおまえだけだ』
「足りないわね」
『そのすらっとのびたながいあしがすきだ』
「んー、どうしようかしら」
『ぼくはツインテイルよりポニーテイルのほうが１００ばいすきだ』
「ふむ」
僕は今にも切られそうな舌と一緒に結果を待つ。
戦場ヶ原は少し考えた後、
「いいでしょう、信じてあげるわ阿良々木君。二枚舌になる前でよかったわね」
と言って僕の舌を解放した。
「はあ、はあ、はあ」
息を整えて、口の中に溜まりまくった唾液を飲み込む。

「阿良々木君に私の指をツバまみれにされたわ」
そう言って、戦場ヶ原はその指を自分の口の方へと運ぶ。
え、なんだこれ。どうする気だ！？
１０センチ、５センチ、どんどん近づいていく。
３センチ、１センチ、・・・そしてそのまま口を通り過ぎ、隣の席に置いてあった八九寺のリュックサックに塗りつけた。
「ぎゃー！何するんですか、私のリュックサックが阿良々木さんによって汚されました！」
「うるさいぞ元凶。自業自得だ」
それにどう見たって僕というよりは戦場ヶ原の犯行だろ。
「阿良々木さんは少女にこんなけがれを背負って生きてゆけと言うんですか！鬼畜です！」
「誤解を招く言い方をするなー！」

三話目（後書き）

「何で私服なのに文房具がいたるところから出てくるんだよ」
「急に阿良々木くんの勉強を見る事になったら必要になるじゃない。だからよ、当然でしょ」
「高校の勉強で三角定規や分度器は使わないだろ」
「阿良々木さん、私たちの関係はその定規と同じように三角関係ですね」
「ややこしくなるから入ってくるな、八九寺」
「そうだとしても直角三角形で言う９０度の部分に阿良々木君。そして６０度のところに私がいるわ。あなたは遠く離れた３０度のところよ、お嬢ちゃん」
「そうですかぁ？案外二等辺三角形なんじゃないですかねえ」
「阿良々木君、何なのこの子。ちぎりとっていいかしら」
「「何を！？」」

明らかに戦場ヶ原がおかしいのでカット！
よかったら他のやつも読んでね

四話目（前書き）

おかしくなるともうとまらない

四話目

床が冷たい。
つまり今現在、僕の体のどこかは床と接していることになる。
それはどこか。
ずばりひざより下、すね部分だ。
「「すいませんでした・・・」」
あの後、口論の果てに僕と八九寺はまた掴みあいの喧嘩に発展した。
揉みくちゃになりながらも、
「揉みくちゃですって？何を揉んだのかしら阿良々木くん」
・・・すったもんだの
「阿良々木くん、わざとなのかしら？」
とりあえず色々あって僕と八九寺両名は教室の真ん中で正座させられている。
これが学校ならＰＴＡに訴えるところだが、いかんせんここは廃ビルで、しかも塾跡だ。
訴えようにも今いるのは他の階にいる忍くらいだしな。
「反省したのかしら？」
戦場ヶ原は教師がよく持っている黒板を指すときの棒で僕の足の裏をつついた。
「ひぐっ！・・・はい・・・」
電流が走り思わずマヌケな声が出てしまった。
「よろしい、あなたは？八九寺ちゃん」
「・・・反省してます」
戦場ヶ原にびびっているのか、八九寺はいじけつつも素直に返事をした。
「だいたい阿良々木さんが私のプリティなリュックサックにいたずらをするから」
「何い？僕じゃないだろ、やったのは戦場ヶ原だろ」

「阿良々木さんの唾液がヌルヌルなのがいけないんです！」
「なんだとお、言わせておけば。ナメクジなんか体中ヌルヌルじゃねえか！」
「勝手に私の殻を脱がさないで下さい！」
「阿良々木くん」
戦場ヶ原が呆れた様な目で僕を見つめた。
「何だよ、僕は高校生の年上としてこいつに口の聞き方を・・・」
「阿良々木君、争いは同じレベルの者としか成立しないの」
戦場ヶ原はぴしゃりと言い放った。

「話を戻すけど、えっと悩み相談でしたっけ？」
「「はい」」
床から開放され、椅子に座りなおした。
戦場ヶ原は机に頬杖をついたまま少し考え込み、カップラーメンが出来上がるくらいの時間が経ちようやく口を開いた。
「私、自分の悩みなんてないわよ」
きっぱりと言ってのけた。
「一つもか？」
「ええ、だって私は阿良々木君と違って優秀ですもの」
「ぐっ・・・」
言い返せないのが腹立たしい。
それにしてもこいつはどれだけ自分に自信があるんだ。
その様子を傍観していた八九寺がニヤリと笑みを浮かべた。
「ほうほう、なるほど。自分の悩みはないですか」
八九寺は知った風な顔で言葉を並べ続ける。
「つまり、自分以外の悩みはあるんですね？」
「・・・そうね」
戦場ヶ原は八九寺の言葉にどこか不満げな顔をした。
「それはずばり阿良々木さん」
「ええ」

「何？戦場ヶ原の悩みって僕なの？」
「当たり前じゃない。私の唯一の汚点よ」
「お前、自分の彼氏をそんな風に思ってたのかよ！？」
「あら、阿良々木君は汚点よりも汚物の方が良かったかしら？」
「どっちも同じようなもんだー！」
声を張り上げて抗議する僕をじっと見つめながら戦場ヶ原は言った。
「でも、私はその汚物の事が頬擦りしたいほどにいとおしいわ」
「・・・」
二人とも無言が続き、僕の方が先に思わず微笑んだ。
本当、いつまで経ってもアピールの仕方がよく分からないやつだよ。
「つまり戦場ヶ原さんの前世はトイレットペーパーだったんですね！」
「八九寺、もうこの話は広げなくていいぞ」

「なるほどなるほど、私はだいたい分かってきましたよ阿良々木さん」
八九寺はメモ帳を広げて何やら書き込みながら頷いた。
あれ、悩み相談ってこんな感じだっけ？
「分かったって何がだよ」
「何って、阿良々木さん。ちゃんと戦場ヶ原さんの話を聞いていなかったんですか？まったく。寝言は寝ていってくださいよ」
こいつに言われると何でも腹が立ってくるのは何故だ？
「独り言は阿良々木さんくらい友達のいない人しか言ってはいけません」
余計なお世話だよ。
「本当に友達が少ない人間は普段喋っていないのでとっさな時に声が出ませんよね」
「それで余計に人が離れていく。最悪のサイクルだよな」
「これぞまさに離（リ）サイクル。っと、話が脱線してしまいました。つまり私が言いたいのは、何故戦場ヶ原さんが私の姿を見ることが出

来たのか」
八九寺が仰々しく言う。
「戦場ヶ原さんは阿良々木さんの事で悩んでいる、そうですね？」
「ええ」
「という事は、戦場ヶ原さんは阿良々木さんの事で人生という道に迷っているんですよ！よって迷っている戦場ヶ原さんにアニメになると途端に優柔不断になるエロゲーの主人公達も裸足で逃げ出すほど迷っていた私が見えてしまっても何の不思議もないんですよ！」
「な、なんだってー！？」
僕は本日何度目かの嘘でしょマークを八九寺に向けて使った。
「では、問題も解決したところで私が戦場ヶ原さんのお悩みについてインタビュー形式で探っていこうと思います」
「インタビュー形式？普通に聞くだけじゃ駄目なのか？」
「ええ、先日ラジオのパーソナリティーごっこをしましたので今回は趣向を変えてインタビュアーにチャレンジしようと思います」
「お前それ完全に自分がしたいだけだよな？」
「ばさねえ、惜しい人を亡くしました・・・」
「羽川はまだ死んでないからな」

四話目（後書き）

「私も友達はいなかったけど定期的に話しかけてくる男子はいたわ」
「これが友達になりたいけどなれない人と友達になりたくない人の違いですね」
「・・・」
よかったら他のやつも読んでね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2892z/

相談物語

2011年12月26日21時10分発行